

北海道の製材業史話

(その5)官営による製材事業のはじまり

林政ジャーナリスト 坂 東 忠 明



■ケプロンの建言

お雇い外国人としてアメリカから招聘されたケプロンは、木挽に木を挽かせたり、人の手で臼を廻したりしているようでは、この国はよくならないという趣旨を述べ、機械技術者のホルトを「器械方頭取」としてアメリカ・オハイオ州から呼び寄せた。

ケプロンの意図は、当初、木材の輸出により産業の近代化を図るために模範的工場をつくり、木材の自給利用と輸出振興を促すべきと考えたのである。それが官営の木挽器械所（製材工場）の設立だった。

札幌器械所は、明治5年に札幌市内、現創成川沿い北1条東1丁目の現北電本社の場所につくられた。

■官営の木挽器械所はどのような施設だったのか

札幌器械所は明治8年。約3haの敷地に設置された。

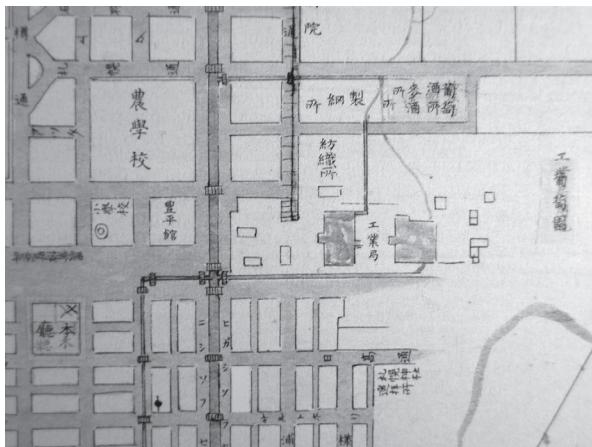


図1 札幌器械所のある場所（1882年）

図1の中央に創成川があり、その右側の白抜きされた区域が札幌器械所。ここには蒸気木挽器械所、水車器械所、製柾所、木工所の他、鋳物所、製粉所、製鉄所があり、その関連施設や職工住宅があった。図には創成川をはさんだ東向いには豊平館、札幌農学校の名がみえる。

明治8年に設立にかかわったとされる機械技術者・ホルトの水車器械所はどのようなものであったか。近

くの川から水を引き込んで造られた大きな水槽が特徴であった。水槽（貯木池）は蒸気木挽器械所（1台、25馬力）にも利用されていた。水車器械所は、水槽に落差を設けて水車を廻し、丸鋸、堅鋸等を駆動させた。原料の丸太は豊平川上流からの筏流しを経て運搬していた。

直径48cmの水車を本国から輸入した。丸鋸を増やしたために、3台で100馬力の水車としたが、冬季に水路が凍って水車が故障するなど、水車による製材は必ずしも順調ではなかった。ここの加工材は、主に家材用の板、障子材、木舞や中貫、柵など造作材であった。

■アシリベツ（厚別）水力木挽器械所

厚別水車器械所は、札幌の開拓が進み、木材の需要も増えたので明治13年に操業することになった。その場所は札幌より南方約16kmの厚別官林で、現在の滝野すずらん丘陵公園地帯である。当時器械所の付属山林として約3,300haあり、エゾマツ、トドマツが繁茂する場所であった。

厚別川は水量が豊富で、最盛期には水車2台で82馬力の能力を持ち、10台の製材機を稼働していた。ところが札幌市内から離れていたために製材の輸送には不利ではあったが、厚別川の水量と豊かな資源に囲まれた場所として他に適地がなかったと言われている。

札幌南区の常盤から滝野すずらん丘陵公園に向かう道の途中に「厚別水車器械所跡」の記念碑がある。そこには「開拓使はこの地に厚別水車器械所を建設し、2台の水車を動力に丸鋸、横切り鋸、柵挽鋸、柵鉋を用い、主に屋根柵を生産した」と記されていた。

この器械所は、明治21年に閉鎖されたが滝野は賑わったという。



厚別水車器械所跡の碑

■官営製材工場はどうなったか

開拓使は、あらゆる産業に洋式工業を取り入れ、西欧の新技术、普及に努めた。明治5年、札幌に蒸気木挽器械所、水車器械所、明治7年室蘭蒸気器械所、明治12年厚別水車器械所、明治13年七飯水車場、根室器械所であった。製材機械は明治4年に蒸気円鋸、水車元車をアメリカから導入し、開拓使は器械方頭取のホルトと器械方補助サンドフォード・クラークを雇った。ホルトは2年後に帰国したが、クラークは洋式鋸の使い方を職工に伝習、指導した。

明治19年には財政緊縮政策の一環として、官営工場は整理され、明治20年までに、製材技術が普及、定着する成果を挙げずに、器械一式は払い下げされて官営工場としての役割は終わった。

■木挽山（こびきやま）のこと

標高102mほどの低山である。地形図にない山だが、この木挽山は、郷土の歴史の片隅にかろうじて残っている。場所は現在の豊平区澄川4条7丁目11番地、地下鉄自衛隊前駅から300m。周辺は住宅に囲まれ、ここが森林に覆われていたという明治時代を思い浮かべることはできない。

頂上から北の1500m先に標高90mの天神山、南に羊丘から澄川や西岡にかけて丘陵を望むことができる。西には藻岩山、真駒内団地が広がっている。木挽山はもはや山とは言えず孤立した木立に過ぎない。木挽山はいわゆる滝野、羊丘、西岡一体の丘陵地帯の一部だったが、今では天神山も木挽山から原始の森の面影はない。

郷土誌「すみかわ」によれば、木挽山の西山麓に豊

平川の精進川があり、明治5年、その河川沿いに木挽小屋など施設を設け、厚別水車器械所に先駆けて札幌本府建設を急ぐために、精進川周辺の森林の製材をおこなうこととなった。明治9年には真駒内種畜場の建設もはじまり、過伐と言われるほど活況を呈していた。

やがて木挽山の製材は明治13年から操業した厚別水車器械所へと移り閉鎖された。当時、頂上に祀られていた山の神は、地域の開墾や造林事業に功績をあげた熱心な篤志家が、開拓をしのぶ「碑」として他に移し、木挽山は「慈恵の山」と、地元では呼ばれている。

■なぜ官営の製材は頓挫したのか

北海道に明治政府直轄の開拓使を置いて、国家による莫大な投資を北海道に注入した。それが本土からの入植者の移住促進、殖産興業の下での官営工場の設立であった。北海道全土を無主地とし、特に森林は独占的な官林の資源とし、これを原資に先行投資を官営工場に集中した。

当初、他県からの移入材を禁止したが、製材は思うように販路をひろげることができず、現代で言う‘地産地消’的利用にとどまり、製材工場の運営は苦境に立たされた。また電力不足から製材機械の動力も水力の製材に頼らざるを得なかった。札幌器械所内に併設した水車器械所は、水槽を利用して人工的な落差で動力を得るという方法も苦肉の策に過ぎなかつた。北海道の産業近代化は、欧米の最新製材機の導入だけでは製材業の基盤は固まらず、民間資本の育成策につながらなかつた。

【参考文献】

- 1 「お雇い外国人」『札幌文庫19』札幌市教育委員会 1981年
- 2 吳農「明治前期北海道における官営工場の建築施設に関する研究」北大工学部学位論文（甲第5155号）2003年
- 3 郷土誌「すみかわ」澄川開基百年記念事業実行委 1981年
- 4 山林史編集委編『北海道山林史』北海道 1953年